

想像させ、付近に住居跡が存在する可能性を強く示唆している。

北上川流域では近年、厚い洪水堆積層の下位に縄文時代晩期～弥生時代の生活面が検出される例が急増している。今後、同様の立地における該期遺跡の調査例が蓄積されることにより、該期の人間活動がより詳細に復元されることを期待したい。

(村上)

3 C 区

(1) 陥し穴状遺構について

陥し穴状遺構は計32基確認された。形態は円形、溝状の2種類に大別されるが、溝状は溝状と楕円形状に細分される。ここでは溝状と楕円形状、円形の3つに細分して、陥し穴状遺構について述べることにする。

一般的に陥し穴状遺構からは遺物が出土しないことが多い。従って、新旧関係や年代を把握するには遺構間の切り合いや自然科学分析などに頼らざるを得ない場合が多い。大西遺跡の陥し穴状遺構についても、単独存在のため、時期を判断することが困難な陥し穴状遺構が多かったが、新旧関係や年代把握するのに使用できる陥し穴状遺構があること、さらにいくつかの傾向が認められるので、ここで記述する。

① 陥し穴状遺構の帰属時期及び形状の変化

大西遺跡で確認された陥し穴状遺構のうち、重複関係や自然科学分析によって帰属時期や形状の変化について分析可能な遺構は4基ある。

a 遺構間の重複関係にみる陥し穴状遺構の新旧関係

遺構間で重複関係を捉えることができる陥し穴状遺構は溝状の陥し穴状遺構2と7、楕円形状の陥し穴状遺構8、円形の陥し穴状遺構23の4つである。

陥し穴状遺構2は縄文時代晩期の土坑である土坑1と重複関係がある。重複関係は、深さ45cmある土坑1の底面で陥し穴状遺構2の平面を確認している。土坑1検出の段階では陥し穴状遺構2は検出できず、土坑1完掘後に陥し穴状遺構2を確認していること、陥し穴状遺構2上部の土坑1埋土中に礫などの遺物があることなどから、新旧関係は土坑1が新しく、陥し穴状遺構2が古いことは明白である。さらに、土坑1からは縄文時代晩期中葉の土器が出土しており、このことから、溝状の陥し穴状遺構が形成された時期は縄文時代晩期中葉より前であるといえよう。

陥し穴状遺構7と陥し穴状遺構8は、相互に重複関係がある。陥し穴状遺構7は溝状の陥し穴状遺構、陥し穴状遺構8は楕円形の陥し穴状遺構である。平面検出の段階で重複関係が認められたものの、埋土が非常に類似しており、新旧関係を把握することはできなかった。そこで陥し穴状遺構7を長軸方向に縦に半裁したところ、断面の観察で陥し穴状遺構7の埋土が陥し穴状遺構8の埋土を壊している様子が観察された。このことは、溝状の陥し穴状遺構が新しく、楕円形の陥し穴状遺構が古いことを示すといえよう。陥し穴状遺構8に火山灰や杭跡は認められなかった。

最後に陥し穴状遺構23について述べる。陥し穴状遺構23も陥し穴状遺構2と同様に土坑1と重複関係がある。土坑1の検出面がC-IV層であったことから、土坑1完掘後、C-V層まで検出面を下げたところ、C-V層の上面で陥し穴状遺構23の平面を確認した。検出された平面の形状から土坑1と重複関係が認められる可能性が出てきたことから、半裁し断面を観察したところ、陥し穴状遺構23が土坑1の下にもぐり込んでいる様子が確認された。このことから、新旧関係は土坑1が新しく、陥し穴状遺

構23が古いこと、円形陥し穴状遺構の形成時期は縄文時代晩期中葉より前であることが明らかになった。

以上のことから、本遺跡における陥し穴状遺構の構築年代の下限は、まず縄文時代晩期中葉であるといえることができる。

b 円形陥し穴状遺構の年代

陥し穴状遺構23では埋土下部の6層及び8層から炭化物が見つかったことから、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、6層出土試料が $5,840 \pm 40 \text{yrBP}$ 、8層出土試料が $5,890 \pm 40 \text{yrBP}$ という値が算出された。このことは、縄文時代前期にはすでに陥し穴状遺構23は埋まり始めていたと考えられる。同じ円形陥し穴と考えられる陥し穴状遺構22からは尖底になると見られる繊維の混じった縄文土器(335)も見つかっており、円形陥し穴は縄文時代前期にはすでにあったものと考えられる。

②遺構の分布及び軸方向について

陥し穴状遺構を形態別に見ると、次のような傾向が認められる。

a 溝状の陥し穴状遺構

調査区全域に分布する。東西方向に長軸をもつものが多く、これは地形の傾斜方向にはほぼ合致する。長軸方向が一致するため、同時使用の可能性があるものも見受けられるが(陥し穴状遺構10と陥し穴状遺構7、陥し穴状遺構1と陥し穴状遺構2など)、調査区域内における配置の規則性は認められない。開口部長は1.5～3.5m、開口部幅は0.4～0.7mのものが主体を占める。ただし、ひょうたん形に近い形をした陥し穴状遺構5や17の場合、開口部幅はかなり広がり、1m前後になることもある。

b 楕円形状の陥し穴状遺構

調査区東側に分布する。断面形状はV字形を呈している。開口部長はいずれも1.7m前後、幅、深さは1m前後である。杭状の穴や火山灰が入っている様子は認められない。2基のみであるので、一概に言えない部分はあるが、2基はほぼ並んで位置し、長軸方向もほぼ一致することから、同時使用の可能性がある。

c 円形状の陥し穴状遺構

調査区西側に分布する。断面形状は方形あるいは逆台形を呈する。開口部の径は1.2m前後を測るものがほとんどである。洪水堆積層である黄褐色土堆積前の段丘崖から斜面にかけて、基数はまちまちだが、ほぼ並行に並ぶ様子が見られる。

③陥し穴の埋土について

大西遺跡で確認された陥し穴状遺構を、埋土の観点から見ていくことにする。

最上層の埋土は、円形陥し穴の場合、暗褐色シルトを主体とする。一方、楕円形陥し穴及び溝状陥し穴については、黒褐色シルトを主体とする。最上層以下の埋土を見ても、円形陥し穴の場合、黒褐色シルトが入ることはない。一方、溝状及び楕円形陥し穴の場合、堆積過程はほぼ同じだが、最下層の土質に違いが見られる。溝状陥し穴の場合、最下層が黒褐色土である傾向が強いが、楕円形の場合、黒褐色にならないようである。

④まとめ

田村壮一氏の研究によると縄文時代前期初頭以前に円形が現れ、中期末から後期初頭の溝状を経て(注3)、晩期中葉から平安時代まで楕円形が存在したと指摘している(田村 1987)(注4)。

今回の大西遺跡の場合、縄文時代前期に円形の陥し穴状遺構が現れ、溝状の陥し穴は縄文時代晩期中葉以前に出現することが明らかになった。これは田村氏の指摘している大きな流れから外れてはいない。

しかし、楕円形については検討の余地が残されよう。大西遺跡の場合、1例のみであるが、楕円形の陥し穴状遺構が溝状の陥し穴状遺構に切られている様子が観察されているものがある（陥し穴状遺構7と8）。どちらも遺物が出土しておらず、具体的な時期については不明である。

灰白色の火山灰が入っていない例としては、札幌市S239遺跡やS255遺跡で、埋土中から縄文時代中期土器片が出土している例がある（札幌市教委 1975、札幌市教委 1979）。

一方、底面に十和田aとみられる火山灰が入る例としては、胆沢町宮沢原下遺跡の例がある（（財）岩手県埋文センター 2005）。

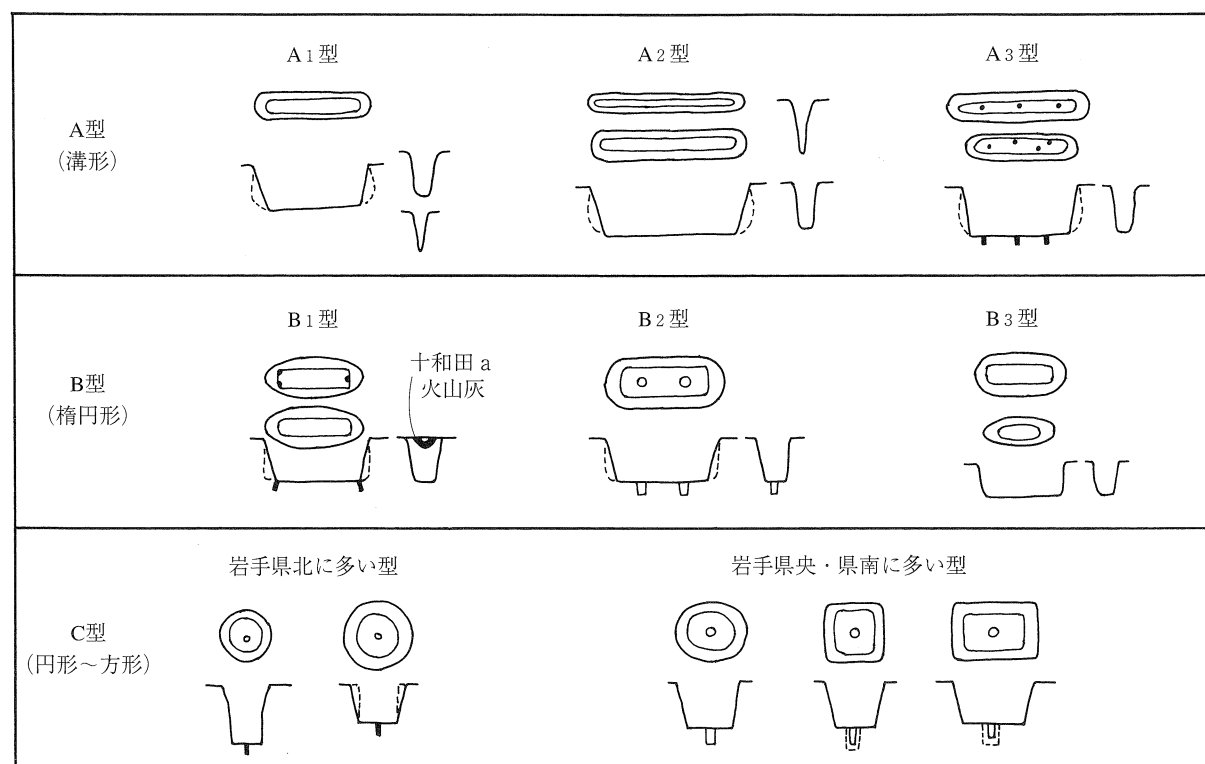
以上のことから、おおよその形態変遷は田村氏の述べているとおりであるが、楕円形の陥し穴状遺構については、十和田a火山灰の有無や構築方法によって時期が大きく変わる可能性があると思われる。

陥し穴状遺構の場合、田村氏も地域的相違や年代について相互の関係を今後より検討しなくてはならないと述べられているが、まさにその通りであり、陥し穴状遺構の年代を推定する場合には、形態ばかりでなく、埋土など複数の視点から検討すべきであろう。

（戸根）

（注3） 溝状陥し穴については後期初頭以降にも残っていた可能性を留保している。

（注4） 晩期中葉から平安時代まで楕円形が存在したというのは、杭状の穴の痕跡があるB1型のみであり、灰白色火山灰が入っていない楕円形の陥し穴については縄文時代のものであるという捉え方にとどまっている。



第56図 陥し穴状遺構の形態分類模式図（田村 1987を一部改変）

（2）亀形土製品について

土坑2で1点出土している。平面形態はほぼ楕円形で、正中線が認められる。左右4対の足を模した切り込みがあり、胴部には両面に沈線が入っている。顔面は突起状に表現している。2ヶ所に穿孔